

チョコレートに関する「深イイ話」

2月14日は、世間一般には「バレンタインデー」です。そこで、今日はチョコレートに関する話をしたいと思います。昨年、朝日新聞にあった記事です。

終戦（1945年）の翌年、2月か3月の土曜日と記憶している。群馬県伊勢崎市の森とよ子（現在77歳）さんは小学校1年生だった。

学校でチョコレートが配られた。「アメリカ軍からの支給だったと思います」。丸くて銀紙に包まれていた。子どもの口に一口では入らないほどの大きさ。教室でちょっとなめてみると、ほろ苦い甘さ、今までに食べたことのない味。あまりにおいしかったので、食べるのをやめた。母ちゃんと一緒に食べよう。森さんは家に持ち帰ることにした。

帰り道。家までは1.5キロほどあった。友達と別れてから1人で歩くうち、ちょっとだけ、とチョコを取り出してなめてみた。目がくらくらするようなおいしさ。でも一回で我慢した。

でも少し歩くと、ちょっとだけ残しておけばいいからと思って、また一回なめた。我慢、なめる、我慢、なめる…と繰り返すうち、家に着く少し前に、とうとうチョコは銀紙だけになってしまった。

大好きな母ちゃんにひとなめもさせず、全部自分で食べてしまった…。森さんは、しょんぼりと家に入り、出迎えた母に、ことの次第を話した。

「とよ子ちゃんがもらったものだから、とよ子ちゃんが食べればいいんだよ。母ちゃんに持って来てくれようとしたその気持ちがうれしいよ。母ちゃんはチョコレートよりその優しい気持ちのとよ子ちゃんが大好きだよ」。母の言葉に、森さんは元気を取り戻した。

2006年に母が95歳で亡くなるまで、この時のことを2人で話したことはない。「幼いながら自分の弱い心を恥ずかしく、情けなく思っている私に、悪い思い出を残さないよう気遣ってくれた母の温かさと、初めてのチョコレートのほろ苦い甘さ。70年経った今も忘れません」

この新聞記事を読んで、私も自分の86歳の母を思い出しました。以前、全校朝会で話したことがありますが、県立高校の合格発表を見に行った時のことです。合格祝いに、母と当時珍しかったレストランに入りました。その頃最高のごちそうであるカツ丼とカツカレーのどちらにしようか迷っている私に「二つとも食べていいよ」という母の言葉。もちろん迷わず二つ食べました。しかし、母はニコニコ笑いながらも、何も頼みませんでした。親というのは、そういうものなのです。みなさんの中には、「自分の親だけはそうじゃない」と言い張る人がいるかもしれませんが、それは真実が見えていないだけなのです。自分の子どもがいとおしくない親がいるはずはないのです。もしかすると、家ではさからったり、口答えをしている人、まさか「鬼ばばあ」なんて言ってる人はいないでしょうね。新聞記事のとよ子さんのように、『親に何かしてあげたい』という気持ちが持てれば、もっともっと親の気持ちがわかってくるはずです。私も、母の気持ちがわかってきたのは、高校を卒業して、東京で一人暮らしをするようになってからです。

さて、学校においては、先生はみなさんの家族のようなものです。担任の先生が親だとすれば、私は祖父のようなものではないでしょうか。ですから、担任や部活の顧問の先生に感謝の気持ちをこめて「チョコレートを渡したい」と思うのかもしれませんが、学校では不要物の持ち込みを制限しています。これはバレンタインデーも同様です。私も、せっかくのチョコレートを受け取らないという行為はとりたくありません。そういう事情を理解して、学校への持ち込みはがまんしてください。

最後に、チョコレートをもらう人ももらえない人もそれぞれいると思います。もらった方がうれしいわけですが、もらえないからといって、必要以上にガッカリしないでください。世の中には、これからそんなことはいっぱいあるわけですから。私も、何十年ももらわなかったことがあります。気持ちを強く持ってください。（私はかなり鍛えられました。）

【今日のひとり言】

●今日の朝、私が出勤してきたら、3年生の女子生徒もちょうど登校して来たところでした。「勉強の調子はどう？」と聞いたら、「とにかく眠い」という返事でした。毎日遅くまで頑張っているんだらうと思い、「妹（6年生で来年4月に入学予定）はどうしてる？」とさらに聞いたら、「ダラダラしています」ということでした。そんなに“ダラダラ”しているわけではないのだと思いますが、志望校合格を目指して必死な姉から見ると、“のんびり”していることも“ダラダラ”しているように感じられるのかもしれませんが。3年生のみなさん、あと少し！ここが踏ん張りどころですよ。

●今日の私の似顔絵は、バレーボール部2年の さんに描いてもらいました。丸まるとした私を表現してくれたのだと思いますが、何かホッとするような感じがします。